

Key word 【脳卒中片麻痺】 【社会リハビリテーション】 【主体性・モチベーション】

利用者の主体性が生活力の向上に影響を与えた事例

対象者 50歳代・女性 主診断名 脳出血 障害名 左片麻痺・高次脳機能障害

病院でのリハビリとの違い



- 身体機能に対して固執し、本人の状態は良くなっているにもかかわらず、他者と比較して落ち込む。
- リハビリはやってもらうものという意識が強く、病院での個別リハビリとの違いを理解できない。

訓練の目的意識が不明確



- 生活環境として、夫に収入があり、家事も夫が行っている状況のため、必要性が低い。
- 就労を目的に利用開始したが、復職に対して後ろ向きで、「やりたいか」ではなく「できない」と判断してしまう。

Point!!

- 本人がどの程度必要性に迫られているかを把握するため、家庭内での役割や生活環境などの情報収集が重要である。
- まずは本人との関係性を作り、障害理解の部分には寄り添ったケアをしながらも、訓練に自発的に取り組んでもらう必要性を伝えていく。
- 日々の訓練プログラムは本人に選択させるなど、本人が意思決定を行う場面を作るようにする。